

続 き

振り返れば先の東京オリンピックの開催を機に1964年（昭和39年）4月1日に提唱された『海外旅行の自由化』によって、海外旅行は自由時間活動として一般的に定着してきました。自由化から海外旅行のスタイルも次第に短期周遊型の旅から比較的長く一定の地域に滞在して、現地で生活を楽しみながら自由な生活体験をするという個人が望む旅のスタイルが生まれてきました。当時は360円時代、定年制は50～55歳でした。

このような社会的背景をうけて通商産業省が打ち上げた1986年7月に海外滞在型余暇研究の『シルバーコロンビア計画』が『プラザ合意』で急激な円高が進みバブル期を迎えていた頃で物価の安いスペインやAUST. やNZなどで過ごすことを夢みたのが日本人の海外ロングステイの発端でした。

当時の定年退職者は、戦後の日本経済の発展を牽引してきた世代です。戦後のアメリカやヨーロッパ文化に憧れた世代で英語が話せることがエリートと思われる世代、海外駐在が出世コースだった世代、ほとんどが高学歴、上場会社の役職経験者や、駐在経験が有る方々が多かった時代でした。

時はすすみ、定年制は過去の55歳から60歳が定着し、年金の支払い開始が世代間格差を生じながらも徐々に60歳以上へと移行してきました。

ちょうどこの頃**1990**年、我がLSCの創立者の塚本茂さんが政府に先駆けて海外ロングステイの普及活動を提唱されたのがこの時期でした。定年後の海外LSは一部の余裕のあるサラリーマン諸氏でもなく普通の夫婦が年金の範囲でも暮らせる東南アジアへとシフトしていきました。それぞれが海外志向で夢を追いかけていった時代はそれなりに楽しかったものです。

団塊の世代(1945年～1947年頃生まれ)はLCCの到来により容易に海外への移住でもなく気に入ったところで自分なりの生活体験を楽しむムーブメントを引き起こしてきました。

時代は変化しています。**1992**年に定義された2週間以上の枠に拘ることなく自由な旅を求めていきました。

これからの私達が求めるものは滞在期間の長短にかかわらず旅そのものを求めることが新しいトレンドとした旅のスタイルであったと思います。

物見遊山のパッケージツアーの旅でもなく、出来るだけ移動の少ない滞在型にして、そこを拠点に自分なりの過ごし方の旅があっても良いのではないのでしょうか。

以上